アルナシームの引退に寄せて④

皐月賞への道が閉ざされ休養に入ることになったアルナシーム。日本ダービーの切符を取りに行くことも話に上がりましたが、当時は距離への不安もあったことに加え、心身ともに成長の余地が大きく、このタイミングで無理をさせない方がいいであろうとの結論に至り、春シーズンは全休させることになりました。もし、ダービーに固執していたらどうなっていたのかは知る由もありませんが、無理をしていたら、競走馬として“終わって”しまった可能性もあったのではないでしょうか。あそこでの我慢がその後の成長や飛躍につながったと思っており、関係者の皆様には感謝しかありません。

リフレッシュが完了し、橋口先生から今後の方向性や目標などについてご相談があり、ローカルではなく、できればゆったり走れる中央場所の芝 1800mで、そして、鞍上は福永騎手で復帰させたいという方針が決定します。勝ててはいませんでしたが、完璧な騎乗でレース内容が非常に良かっただけに、福永騎手にこだわりたいということになったのです。しかし、一流ジョッキーの福永騎手がその条件で騎乗可能なレースがなかなかなく、宝塚記念当日の阪神・城崎特別での復帰ということになりました。パドックでは二人引きではありましたが、イレ込みということではなく、ほど良い気合い乗りで、相変わらず前進気勢と弾力性に富んだ歩様と姿を披露。今回も目隠しをしての先入れでしたが、ゲート入りも問題なく、スタート、道中、直線とまさに非の打ち所がないレースを見せてくれました。ただ、それだけに、最後に詰め寄られてしまったことを当時は物足りなさを感じたのですが、２着馬ものちのオープン馬でしたから、悲観することはまったくなかったものの、それだけ期待が大きかったということでもあります。あの暴走劇から１年も経っていないのに、これだけ安定して取り口を見せられるようになったことは驚異的とも言え、陣営と各関係者の努力の賜物です。ちなみに、コロナ禍の影響により、新馬戦に続いて会員様の口取りの参加は再開されていなかったため、寂しい雰囲気だったことを思い出します。

福永騎手からは、「思いどおりのレースができて追い出しも待ったが、それでも最後は甘くなった」というコメントがあったこともあり、夏休みを挟んでマイル戦で復帰させるということになりました。当然、次走も福永騎手とのコンビです。次走は秋の阪神開幕週（京都競馬場が改修工事のため、変則開催でした）で組まれている瀬戸内海特別に決定し、奇しくもこの週から会員様の口取り参加が再開されることもあり、否が応でも期待が高まりましたが、久々に会員様をご案内する可能性があるということで、緊張感を持って阪神競馬場へ向かいました。

当日はコンティノアールが新馬戦に出走しており、幸いにもデビュー戦を勝利で飾ることができましたが、会員参加が解禁されたあとの阪神では最初のクラブ馬の勝利です。コロナの影響で従前とは導線や運用法が若干変わっており、同業他社のスタッフさんからは「勉強のため、見させてください」と言われたほどでした。緊張しやすいもので、震えながら会員の方の出席確認を行いましたが、久しぶりに喜びを分かち合える時間だったこともあり、皆さんの喜ぶ姿に救われたことを思い出します。アルナシームは今回も１番人気の支持でしたが、それに応えるような快勝ぶりで、今回も福永騎手の手綱捌きにしびれました。詳細は割愛しますが、この口取りの際にトラブルが生じ、各方面にご迷惑をおかけすることになってしまったのは猛省しなければならず、以降は参加時のルールをあらためて周知し、遵守いただくようにお願いをしているところです。レースに話を戻すと、マイルに短縮したことが功を奏したようで（あくまでも当時のお話です）、「乗った中で一番良かった」というコメントがあったように、レース内容は申し分なく、走破時計からも今後に向けて期待が膨らみました。

普段のお世話でも調教でも、五十嵐助手やスタッフの方がかなり苦労されていると橋口先生からも伺っていましたが、レースでこれだけ優等生な立ち回りができるようになったのは、皆様の努力のおかげであり、アルナシームは人や環境に恵まれていた馬だと思っています。どんなに優れた脚力を持っていたとしても、それをレースで発揮できずにターフを去った馬は数知れず、色々な馬を見てきていただけに、あれだけ課題のあった馬が、良さを損なわずに、これだけ順調に出世できていることは奇跡と言っても大げさはないはずです。次走は、やはり福永騎手にこだわり、東京の秋色ステークスを目指すことになりました。しかし、結果的に次走が最後のタッグになってしまったのです。

次回に続く